

検査ニュース

おしっこ(尿)のお話

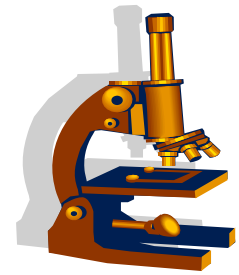


おしっこ(尿)は腎臓で作られます。腎臓は働き者で、毎日 24 時間、休むことなく、血液から水や、体に必要なものと必要でないものを仕分けしています。血液は体重の 1/13 と言われていいますので、体重が 60kg の場合、おおよそ 4.6 リットルの血液を腎臓で仕分けして、一日、1.5 リットル程度をおしっこ(尿)として排泄します。



おしっこ(尿)で何がわかるの？

おしっこ(尿)を検査することにより、腎臓や尿管(おしっこが通る管)、膀胱(おしっこを溜める袋)や、体の様々な臓器の病気がわかります。例えば、おしっこ(尿)の中に糖がたくさん混じっていると糖尿病が疑われます。タンパクがあると腎臓の病気、血が混じっていると腎臓や尿管、膀胱に石があるかもしれません。おしっこの中にある細胞を顕微鏡で見ることにより、膀胱癌などが見つかる事もあります。



検査の種類

- **尿定性**(一般的に尿検査と呼ばれる)：尿に試験紙を浸して検査します。項目は、タンパク、糖(ブドウ糖)、ウロビリノーゲン、潜血、pHが基本となります。
- **タンパク**：健康な人でも少量混じっていますが、多量になると、腎臓、心臓、血液、肝臓の病院や高熱が出る病気で見られます。
- **糖(ブドウ糖)**：一度に大量の糖を摂取した場合、健康な人でも糖が混じります。ストレスや運動後でも見られることもあります。やはり、糖尿病が代表的な病気です。
- **潜血**：血尿には、目で見てわかるものと、検査を行って初めてわかるものがあります。無症状な場合もありますので、定期的に行うことをおすすめします。

ちょっと一息

～医療空間のための環境音楽～

臨床検査技師 村中尚毅

医療機関で音楽を流し、患者らの気持ちを和らげる取り組みに注目が集まっている。環境音楽の専門家に館内 BGM の作曲を依頼したり、検査室で音楽や映像を流したり。患者をリラックスさせるだけでなく、医師や看護師らの緊張を緩和するのにも役立つという。患者向けの院内コンサートは多くの病院で行われており、音楽がもたらす効果への期待は高い。外来の待合室は多くの人が行き交い騒々しいが、耳を凝らすと、ゆっくりとして落ち着いたピアノの音色が聞こえる。堺市にある耳原総合病院の現場での実際の様子である。病気を治すには患者に施術するだけでなく、心理面の質的向上も不可欠である。現に医療空間では、緊張感が漂い患者とスタッフが高密度にひしめき合っている。その状態を音楽のチカラで心理的に緩和する必要があることから、次のようなものが作られました。一度聞いてみてはどうでしょう。



紹介
Beside LIFE
Masafumi Komatsu

出典：日本経済新聞、大阪市広報